

音 楽 科

乗 富 章 子
荒 木 泰 彦

1 音楽科の本質について

私たちは、音楽科の本質を次のように考えている。

音に心を動かし 音を楽しむこと

私たちの周りにはさまざまな音があふれている。心和ませる音もあれば、不快を感じる音もある。私たちは音に接したとき、ごく自然に快不快を判断し、より快い音を求めようとする。自分にとってどんな音や音楽が快いか、自分が大切にしたい音や音楽はどんなものかを感覚的に捉えることができれば、心から楽しんでそれを表現したり鑑賞したりできるであろう。

音や音楽を感覚的に捉えることができるようになるには、二つの面からのアプローチが大切であると私たちは考えている。

その一つは、音楽の芸術性に触れて経験する深い感動、そこから生まれる深い感動、合唱やアンサンブル活動を通して培われる協調性や社会性、技能の習得に挑戦して、自分の探求心を深めたり、創意工夫を生かして豊かに表現しようとする創造性などの人間としての資質を養うことである。

もう一つは、五感を働かせて音や音楽への感性の能力を培うことである。それには、音楽を感じ取る感受力、音楽を理解する知覚力全体のバランスをよく見て決める判断力、心を込めて的確に演奏する表現力などを養うことである。

このように考えると、音楽科の学習は、子どもが音や音楽に素直に反応し、友だちや教師との温かなかわりの中で、五感を十分に働かせながら音や音楽そのものの美しさを心から楽しみ、豊かな感性を培っていくことと捉えることができるだろう。

これらのことから、音楽科の本質を上記のように捉えた。さらに、このようにして培われた新たな感受力、知覚力、判断力、表現力が、感性の能力となり、知性と教養の醸成につながると考えている。

2 音楽科の「学び」について

音楽科で扱う内容は、「表現（歌唱・器楽・創作）」と「鑑賞」の4つの活動領域から成り立っている。この領域の中で、「音楽的なまとまり」「生活経験的なまとまり」「楽曲そのものの美しさを中心に置くまとまり」の三つを念頭に置いて題材を構成する。そしてその題材の一つ一つが学びの対象である。

これらの題材のもと学習を進めていく上で、「つくる」→「演奏する」→「鑑賞する」という音楽学習の基本的な流れと常に関連して捉えていきたい。なぜなら、音楽という営みは、つくって表現し、それを聴くという活動の繰り返しによって成り立っていると考えているからである。

このような活動をくり返すことによって、音楽的コミュニケーション（音楽を媒体とするコミュニケーション）が活性化され子どもの音楽経験の質が高められていく。そして生涯学習を視野にいたった芸術理解や文化理解の実現につながっていくであろう。それがわたしたちがめざす「知性と教養」であると捉えたい。

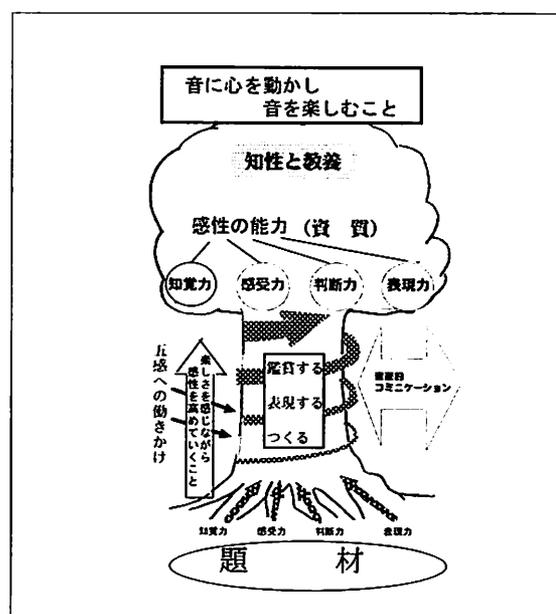


図1 音楽科における学びの構造

3 本質や「学び」にもとづく基礎・基本について

次に、本質や学びにもとづき、音楽科で育てたい基礎・基本について考えてみる。

私たちは、先に述べた三つのまとまり（音楽的なまとまり、生活経験的なまとまり、楽曲そのものの美しさを追求するまとまり）から題材を構成する。そして、子どもが常に楽しさを感じながら感受力、知覚力、判断力、表現力などの能力が自然に身についていくような学習過程を考えていかななくてはならない。これらの能力は互いに関連しながら音楽的感性へと高まっていく。

そこで、音楽科の基礎・基本を次のように考えた。

楽しさを感じながら
自分の音楽的感性を高めていくこと

4 単元（題材）を構想するにあたって

音楽科では、自己の学びを深めるということ、子どもが常に楽しさを感じながらさまざまな音楽的能力を身につけ、自分の音楽的感性を高めていくことと捉えている。そしてその過程をも含めて、子どもが「音に心を動かし、音を楽しむ」ようになることを、願っているのである。

例えば 表現活動でも、音を連ねただけの演奏をすることだけをめざしてはいない。音に自分の想いを込めたり、自分の好きなどころを大切に表現したりしながら、次第に音楽としてのよさが現れる表現へと高まっていったほしい。と同時に、表現される音と、心でイメージした音とを聴き比べることも、大切な活動である。あらゆる音楽的活動において創造性を引き出し、音楽表現をコントロールするのが聴く活動であることを忘れてはならない。そこへさらに、友達と心を合わせて表現する喜びや、友達のよさを認め合う温かさなどが加わってより豊かな表現が生まれる。その中で子どもは自分の音楽的感性を高めていく。

そのような活動を促すために、次のような視点をもって単元（題材）を構想していく。

(1)音楽的活動へのはたらきかけを促す

教材との出会いの場は、子ども自身の想いが表現や鑑賞に向けて膨らんでいく大切な場であ

る。教材曲が子どもにとって大きな魅力を感じられるものとなるように、出会わせ方に様々な工夫をしていきたい。

また、新たな音楽的要素に着目させることによって、それまでとは異なった視点で学習材を捉え、子どもに新鮮な感動を与えるような工夫の仕方も考えていきたい。

(2) 音楽的活動を行う場を保障、設定する

音で確かめ、音で共感し、音そのものの音楽的価値を求めるなど、一人一人の音に関わる活動を可能な限り保障したい。また、私たち教師も、子ども一人一人の想いを表現に生かすために必要な技能を、効果的に教えることが求められる。その子にとって表現をする上で、どうしても必要とされたときに初めて、技能習得のための練習が、その意義を持つと考えている。

(3) 音楽的コミュニケーションの活性化を図る

音楽的コミュニケーションとは、個々の想いが自分だけの想いとどまらないように、イメージを話し合う、試しの演奏をする、同じ想いを持つ子同士でグループを作る、友達の演奏に共感する、など想いを広め合うための活動である。音楽的コミュニケーションを活発に進められるような働きかけで、よさを自分の表現に生かすことができるようにしたい。

さらに、個々がそれぞれのめあてをもって課題に取り組むことを薦めたい。子どもが個々にイメージする音楽像に向けて様々なアプローチを試み、それぞれの違いを認め受け入れながら自分の表現のヒントともする前向きな姿勢を期待している。

(4) 自分自身の音楽的な成長の自覚を促す

教材に初めて出会った時のイメージや表現に向けての想いは、できるだけ記録しておくようにする。また、音という一瞬にして消えてしまうものを対象としているので折にふれて録音や録画で残していきたい。自分の表現のよさを認める友達からの発言、教師の励まし、アドバイスを有効に生かしたい。

聴き合う場をできるだけ多く設定することで自分の音楽的な成長をたとえごくわずかであっても自覚させたい。それが、次の表現への新たなエネルギーを生み出す力となる。

5 実践例 - 3年 -

(1) 題材名 3拍子パーティーをひらこう

- (2) 目標
- ・3拍子の鑑賞曲や表現教材に出会い、リズムに体の動きを合わせながら、楽しさを感じ、意欲的に学習へ取り組むことができる。
 - ・曲想に応じて体の動きやリズムの取り方を変える、言葉あそびやリズム創作をする、などの通して、拍の流れにあった表現を工夫することができる。

(3) 指導にあたって

本題材における基礎・基本について

本題材は、3拍子系の歌唱教材・鑑賞教材を通して、3拍子を身体表現し親しむ活動の題材である。児童は、2拍子・4拍子の楽曲にはよく親しんでおり、音楽科の学習だけでなく日常生活の中でも触れる機会が多い。ところが、3拍子の曲は、曲数が少ないばかりでなく、奇数拍という不規則なリズム構成で、音楽にのりきれないことが多い。例えば、既習曲の「うみ」では、1拍1拍を同じ大きさで捉えてしまい、堅い感じの歌い方をしてしまう。強弱弱という1小節のまとまりとしてフレーズを扱えていないのが3年生の実態である。

3拍子系の曲に違和感なく親しむために、歌唱活動だけでなく、ダンスやリズム創作といった表現活動を取り入れた。また、言葉をリズムに当てはめて表現する「3拍子しりとり」「3拍子日記」という活動を盛り込み、幅広い活動の中で3拍子を感覚的に捉え、この題材以降に出会う3拍子の曲にも「拍子感」をもって取り組めることを期待したい。この「拍子感」を身につけていけば、他の音楽的要素（フレーズ感等）への発展が容易であると考えられる。また、2拍子や4拍子の学習の際も、「拍子」を意識した音楽活動が可能であろう。

本題材は、遊び感覚の活動を通して、親しみの少ない3拍子により多く触れ、楽しみながら拍子感を身につけていくものである。さらに、個の活動から全体の活動へと拡がる中で、他児との音楽的交流の中で音楽的コミュニケーションを活性化し、拍子感に基づいた音楽の捉え方や感じ方ができるようになることを、本題材の基礎・基本と位置づける。

単元計画 (総時数 6時間)

主な活動と内容	学びを深めるために	主な評価のポイント
1 「メヌエット」を曲の構成や3拍子のリズムを意識しながら鑑賞する ・ベーターベンやバイオリンについてわかったよ ・ABAの順番で演奏されているぞ ・いろんな3拍子に合わせて踊ると楽しいな 3拍子にのって楽しいパーティーを開こう	①②	ふしの変わり目を意識しながらリズムにのり踊りを楽しめたか
2 「いるかはザンブラコ」の曲にのってバンブーダンスに挑戦する ・「いるかはザンブラコ」を楽しく歌おう ・3拍子の拍打ちをしよう→強弱弱を意識 ・竹(バンブー)を使ってみんなでおどろう	①②③	拍の流れに合わせてバンブーダンスを楽しむことができたか
3 3拍子リズムパターンで「3拍子日記」を創作する ・いろんな3拍子リズムがあるんだな→10パターン ・言葉をあてはめて「3拍子しりとり」を楽しもう ・「3拍子日記」を創り発表しよう	②③④	日記の言葉をリズムにのって即興的に表現できたか
4 手拍子や打楽器を使って既習の3拍子曲を楽しむ ・曲にあったリズムをつくろう ・手拍子や打楽器を使って3拍子メドレーを歌おう	②④	お互いの作品を聴き合い工夫したことを認めあえたか リズムやバランスを意識して表現できたか

学びを深めるために

① 音楽的活動へのはたらきかけを促す

本題材での新出教材は、歌唱「いるかはザンブラコ」と鑑賞「メヌエット」の2曲である。他は親しみがある既習教材を扱う。拍子感を重視することにより、歌詞から生まれるイメージや旋律の美しさを味わうだけでなく、新たな音楽的要素に着目した捉えができることを期待したい。

② 音楽的活動を行う場を保障、設定する

「メヌエット」に合わせた3拍子のダンス・フィリピンの伝統舞踊のバンブーダンス・3拍子のリズムパターンの学習・言葉を3拍子に合わせる創作・手拍子や打楽器を使ったリズム伴奏、といった動きのある音楽的活動の場を設定し、児童の自由な表現を認めたい。

特に、言葉を3拍子に合わせる創作活動では、即興的な音楽創りを初めて経験する。提示されたリズムパターンを参考にした簡単な創作だが、リズムだけでなく、速度や強弱を工夫することで、自分の想いをより積極的に表出できると思われる。

③ 音楽的コミュニケーションの活性化を図る

3拍子の学習を深めるためには、各々の表現を発表し確かめ合う場が必要である。なぜなら、多くの表現を経験し感じる中で拍子感が育つからである。しかし、単に発表し交流するだけでなく、表現を発表する立場では、「どんな工夫をしたか・何に気がつけたか」を常に意識させ、聴く側には自分の表現と関連付けるよう支援したい。そのような繰り返しの中で「音楽的コミュニケーション」を活性化することができる。

④ 自分自身の音楽的な成長の自覚を促す

個々の表現を、グループや全体の前で発表したり、ビデオに撮って評価しあう活動を取り入れる。「〇〇さんの動きがすてきだった」「△△君の3拍子日記はおもしろかった」等の意見交流が、「次はどこを工夫しようか?」という意識を生み、3拍子を感じ取る力を培い、今後の表現活動への力になっていくことを期待したい。また、「ふりかえりカード」の積み重ねにより、自己の成長を意識させたいと考えている。

(4) 本題材における授業の実践と考察

① 「学びを深めるために」についての概要

ア 「音楽的活動へのはたらきかけを促す」に関して

「メヌエット」「いるかはザンブラコ」ともに3拍子を特に意識させずに活動へ入ったが、展開の中で「拍子感」を重視した学習を進めた。その結果、子どもたちは既習の3拍子教材曲を導入した際も、「拍子感」を意識しながら活動できるようになった。前述した「新たな音楽的要素に着目」することによる活動の広がりがあった。

イ 「音楽的活動を行う場を保障、設定する」に関して

「3拍子しりとり」「3拍子日記」といった、リズムに関する初めての創作活動を体験させたがりズムパターンの提示により、抵抗なく学習に取り組むことができたようだ。また、鑑賞曲に合わせたダンスやバンブーダンスなどの活動のが、創作活動へ効果的に働いた。

ウ 「音楽的コミュニケーションの活性化を図る」に関して

創作場面では、ペア・グループ・学級全体など、交流の場を多く設けた。交流がスムーズに行えるように、活動の場所を広くとったりやビデオの設置などの環境を整えた。この交流活動の中から、様々な形の音楽的な交流が生まれ、個々の音楽を深める素地になった。

エ 「自分自身の音楽的な成長の自覚を促す」に関して

各活動の終わりには、記述式の「ふりかえり」の時間を設けた。単に自分のふりかえりだけでなく、友だちを評価する内容も見られ、書き方も上手になってきた。活動の深まりと他との交流の中で、自己が変容していく姿を記録として残すことができた。

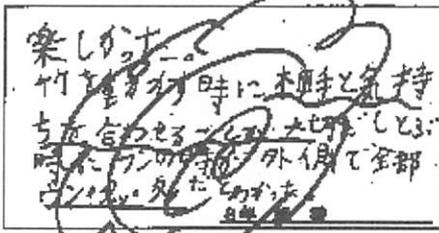
② 授業実践と抽出児(A児)のふりかえりをもとにした考察

以下、授業の流れに沿って、主な評価ポイントのについて、子どもたちの思考や活動の様子・教師の支援を含めて考察する。



本物の竹を使って多人数によるバンブーダンス

「バンブーダンス」楽しかったですか？



単純な「タン・タン・タン」のリズムでの身体表現活動を経験した子どもたちは、次にいろいろなリズムパターンを提示した。右図に示した「リズムパターン」をリズム打ちする活動に入った。第1段階として、タン・タ・カ・ウンといった言葉にあてはめての発音による練習、第2段階としてボディパーカッションを用いた体の部分を鳴らして表現する練習、と発展していった。

特に第2段階では、低学年で既習しているリズム表現を活用して、いろいろなアイデアを生かした活動になった。例えば、4分音符を足ならし・8分音符をひざ打ち・などであるが、徐々に「1拍目を強く打つ」ことを意識するように支援した。

ここで問題になったのは、個々のテンポでリズム打ちをしてしまうため、グループや全体で打つ際にはバラバラになってしまうことである。メトロノームやピアノでリズムをとったが、最も効果があったのは、既習の3拍子曲を流したことである。特にリズムを指定せずに好きなリズムを打たせるところ曲の速さや曲想に応じてリズムを変えながら打てる子が増えてきた。「みんなでコンサート」では〔タンタカ・タカ〕、「いるかはザンブラコ」では〔ウンタン・タン〕、「うみ」では〔タン・タン・タン〕といった様に、曲のイメージに合うリズムを模索しながら表現するようになった。更に一部の子どもたちから、リズムパターンにない新しい3拍子リズムを創作する動きが見られた。2分音符や8分休符を使ったものが多く、A児は「ターン・タカ」や「タカ・タン・タン」を創作した。一方で最後まで、基本の「タン・タン・タン」から脱却できない子どもも多かった。この子どもたちは、1拍目を強拍として意識することができず、速さの変化についてこれないこともあった。この子どもたちには、リズムパ

ーを使わない「シュミレーションバンブー」ができるようになったら、体育用のバーを使って一人練習を始めた。続いて、本物の竹を使っての多人数によるバンブーダンス。ほとんどの子どもたちは楽しくリズムにのってとぶことができ、「じゃんけんとび」や「回転とび」といった技を工夫する子どもも見られた。A児は初め、2・3拍目にのりきれなく、引っかかることが多かったが、D児の「123と声を出しながらとぶ」というアドバイスで連続してとべるようになった。リズムに関する「音楽的コミュニケーション」による効果であると思われる。A児は更に発展し、ふりかえりでは「ウン・タツ・タツ」という3拍子の拍感をパターン化して感受することができた。一方で上手にとべない原因としては、

- ・3拍子にのれない（特に1拍目がとれない）
- ・竹を動かす子どもとのタイミングが合わない
- ・竹（棒）に対する恐怖心がある

が考えられる。3年生3学級でのバンブーダンス習得率は、約70%前後、竹を使わない「シュミレーションバンブー」では約90%に至った。時間の余裕があれば、さらに習得率は上がったであろう。

提示したリズムパターン



リズムパターン打ち練習

～αグループの「3拍子しりとり」～

- (1)しりとり (2)りんご (3)ごま (4)まんじゅう
 (5)うり (6)りすのえさ (7)さかな (8)なっとう
 (9)ウエハース (10)すいか (11)かつおぶし (12)しお
 (13)おかし (14)しかのにく (15)くさもち (16)チョコ

※(3)×(4)×(5)×(9)×(12)×(14)はリズムパターン以外のオリジナル

ターンを、身近な単語に置き換えて言うという支援をした。つまり、「タン・タン・タン＝みかん」「タン・タカ・タカ＝ほうれんそう」といった練習である。これらの活動を応用したものが「3拍子しりとり」である。しりどりのルールで、単語を3拍子のBGMに合わせてグループ毎に順番に言って楽しむ活動で、即興的表現活動として4つの段階を設けた。

第1段階＝自由なテーマ、単語の間に1小節おく

第2段階＝自由なテーマ、単語の間を空けない

第3段階＝グループでテーマを作り、16小節

第4段階＝第3段階のテンポを徐々に速くする

第1段階は、次の単語を準備する余裕があり、どのグループも順調だったが、第2段階では、次の単語が思いつかないことやリズムに乗り切れていないこと、単語が3拍子のリズムにはまらないことが原因で、うまくいかない子どもたちが多かった。第3段階では、テーマに基づいた単語を決めているのでスムーズだったが、2文字や6文字以上の単語につまずいた。前述したリズムパターン以外のリズムを即興的に活用するよう支援し、子どもたちは創作の経験をした。A児はβグループに所属していたが、[(6)ルバンさんせい]や[(15)しか]のリズムを即興的に表現できた。第4段階では、テンポを速くして早口言葉のような言い方をしたり、テンポを遅くして確実にテンポにはまる活動も行った。BGMを自由な速さで提示するために、パソコンを活用し、様々な曲やリズムの変化で、より広範な活動を保障した。(ソフト＝Hello Music for education)

この「3拍子しりとり」の活動では、グループ間の交流も行った。各グループの発表を見合ったり、各グループの様子をビデオに撮影して、自分たちのしりどりを確認する試みも行った。子どもたちは、お互いの工夫したことや自分たちの成果を確認することができたが、「言葉のおもしろさ」や「速さ比べ」に意識が移り、肝心の「3拍子感」から逸脱する向きも見られた。常に「拍子感」を意識するような言葉かけが必要であったと思う。

グループを主体にした「3拍子しりとり」を更に発展し、個々での「3拍子日記」活動に入った。より即興的な要素が強く、リズムにのらないとうまく表現ができない活動である。しりとりとは違って、いくつかの問題点が生じた。

(1)一人で行う活動であること。

(2)単語並べてなく、助詞が必要になること。

(3)全体として日記になるような文章であること。

以上の3点が障害となり、多くの子どもたちは、なかなか作品を仕上げられなかった。A児の場合(2)の問題が創作の障害になった。普通の文章では単語＋助詞が6文字以上のものが多く、3拍子にあてはめにくい。しりとりでは名詞中心であるが、文章にするには他の品詞を多用しなければならない。特に動詞や接続詞の扱いに抵抗があったようだ。拍子感だけでなく、ある程度の語彙力や文章力が必要な活動であり、個々の想いをなかなか表出できない状態が続いた。

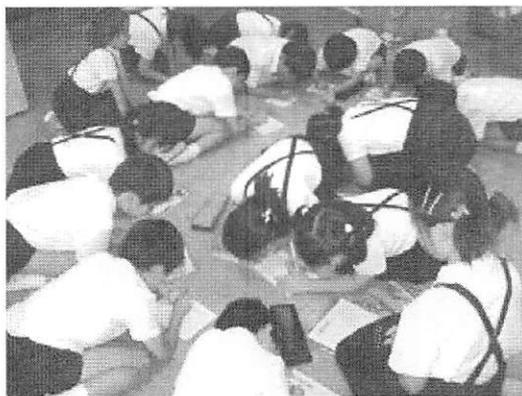
～βグループの「3拍子しりとり」～

- (1)しりとり (2)りす (3)すかんく (4)くま
 (5)まんとひひ (6)ひつじ (7)ジャッカル
 (8)ルバンさんせい (9)いるか (10)かめ (11)めだか
 (12)かずお (13)おっとせい (14)いのしし
 (15)しか (16)かいじゅう

※(2)(4)(7)(8)(10)(13)(15)(16)はリズムパターン以外のオリジナル



グループでの「3拍子しりとり」



各活動の終わりには記述式のふりかえりをし、自己の音楽的成長を自覚できるように資料を蓄積した

3拍子日記の個人発表

一人一人が自分の日記を発表。最少で8小節・最多で24小節の作品になった。聴く子どもたちは、1拍目に手拍子をするなどの支援で盛り上げていた。



